

場所性を与える行動への影響について
-場面における非日常的コミュニケーションを中心として-

学生番号：2008372
氏名：平田 貫
所属：大津 晶ゼミナール
提出年度：平成 24 年

目 次

はじめに	3
1章 研究の背景と目的	4
1-1 研究の背景	4
1-2 研究の目的	4
2章 研究方法	5
2-1 場面の収集	5
2-2 収集したデータ	6
3章 データから見る場所性の考察	7
3-1 データ一覧	7
3-2 道端	10
3-3 公園	10
3-4 海	11
3-5 スキー場・遊園地・温泉・野球場	12
3-6 駅・空港・バス停	12
3-7 データから見る場所性の考察	13
4章 因子分析による場所性の考察	14
4-1 因子分析の適用	14
4-2 因子負荷量による場所性の考察	15
4-3 因子得点による場所性の考察	16
4-4 因子分析による場所性の考察	18
5章 今後の展望	19

はじめに

「人の行動は場所からの影響を受けている」この仮説が私の研究の始まりである。しかしながら、多くの人にとって、これは感覚的なものであって、実際に深く考えられることはない。

例えば、ある人が好意を寄せる異性に愛の告白をしようとするとき、その行動を図る場所の選択に頭を悩ませる人は多いだろう。これは、その人にとって場所のもつ雰囲気が必要となるためである。一方、その中で「告白スポット」と呼ばれる場所が、雑誌やインターネットで取り扱われることがある。これは、多くの人がある場所に何らかの「場所性」を見出し、愛の告白という「行動」を行う傾向が強いことから成立する場所である。

また、待ち合わせという行動を例にあげると、東京であれば JR 渋谷駅の忠犬ハチ公像の前、札幌であれば大通地下街のマルチビジョン HILOSHI の前に人だかりができる。これは、多くの人がある場所に共通のランドマークを指定することで、その周辺は定番の待ち合わせ場所として成立するためである。これもまた、その場所に存在する「場所性」が、多くの人々の待ち合わせという「行動」に何らかの影響を与えた結果である。

学校の屋上という場所を例にとってあげてみると、数十年前に学生だった人にとって屋上という場所は、いわゆる不良学生が学校の授業を欠席して屯する、または後輩を呼び出して先輩としての威厳を見せつける場所といったイメージが強いただろう。一方で、著者のような現在の学生にとっては、TV 番組や漫画などで屋上から自身の心に抱える想いを打ち明けるシーンを見てきたことから、そういった行動を行う場所というイメージを持っているように思う。このことから、時代背景によって場所が人に与える印象は変化していることがわかる。

本研究では、このような人の行動に影響を与える場所がもつ特性としての「場所性」を研究することを目的としている。本研究を型式化し、場所性を分析することができれば、人が図らんとする行動に対して、場所性が効果的に働きかける場所を選択または構築することにつなげることができると考えている。

謝辞

本研究を取り組むにあたって、2年間に渡ってご指導いただきました小樽商科大学商学部社会情報学科の大津晶准教授をはじめ、議論を通して的確なアドバイスやサンプルの収集にご協力いただいた本ゼミナール卒業生、本ゼミナール学生一同に、深く御礼申し上げます。

1 章 研究の背景と目的

1-1 研究の背景

エドワード＝レルフ（1999）によると、現代においては、他所との違いが鮮明でない「場所」が増えてきており、そこは地域の歴史を反映せずに生活感も伴わない表面的な特徴だけを他所から借りてきただけの景観となっている。一方で、従来の社会においては、交通手段やマスコミが未発達であったため、地域ごとで社会的・文化的に閉鎖ユニットが形成されていた。その「場所」はその地域ごとで独特な意味を持ち、他と区別される唯一無二の価値を持っていた。このときの「場所」を他の場所と区別するための要素は、以下の3つがあるとしている。

① 景観を構成する物質的要素・見かけの様子

例：山や丘や大きな木、または建物などランドマークになるもの

② そこで行われる／観察できる人間の活動

例：遊園地（娯楽）、学校（勉強）、駅（移動）など

③ 上記の①・②がその人にとって持つ意味／象徴

例：その土地の印象や個人的な思い出など精神的なもの

ここで、①の物質的要素・見かけの様子は「場所」そのもの、「時間」帯、その場所にある「構成要素」によって変化すると考えられる。この「場所」「時間」「構成要素」が組み合わせることで醸し出される特性を「場所性」として定義する。

1-2 研究の目的

本研究では「場所性」が行動に与える影響を明らかにする。上記の要素にあてはめると、①によって創出される「場所性」が②・③に与える影響を明らかにすることを本研究の目的とする。

2章 研究方法

2-1 場面の収集

今回は、場所性が行動に与える影響を研究するために、ドラマや映画における場面を分析することが主な研究の方法となる。これは、ドラマや映画で主に見受けられる行動である「愛の告白」「悩み相談」「喧嘩」「別れ」といった、非日常的コミュニケーションが表現される場面において、「場所」「時間」「構成要素」の傾向を把握することを意図している。

分析対象とするドラマや映画の選択に関しては、視聴率や興行収入の高いものを選択し、SFや時代劇といった非現実的なジャンルを選択しない。このことは、分析対象とするドラマや映画が多くの人々の共感を得ていること、現実との関連性がある場面の分析につながることを前提とするためである。ドラマや映画で表現される世界観は、その作品によっては社会現象に発展するといった事象もあることから、この手法は妥当であると考えられる。

収集したそれらの場面をもとに下記の項目ごとの関わり合いを分析し、場所性が行動に与える影響を考察する。

<データ化する項目>

- ① 年代 放送・公開された年代
- ② 行動 【告白・相談・別れ・喧嘩】に分類
- ③ 場所 そのシーンの背景となる場所
- ④ 時間 【昼・夜】に分類
- ⑤ 構成要素 その場所を構成している要素

図 2.1 のように、ある場面における「行動」と「場所・時間・構成要素」を分析していく。



- ① 年代：2000年代
- ② 行動：相談
- ③ 時間：昼
- ④ 場所：公園
- ⑤ 構成要素：ベンチ／木／建物

図 2.1 場面からデータを収集することの例

2-2 収集したデータ

<分析対象としたドラマ・映画>

表 2.1 は、分析対象としたドラマ・映画と、放送された年代・平均視聴率・収集できた場面の数である。今回の分析は、以下のドラマ・映画で収集できた 470 の場面をもとに実施した。

表 2.1 分析対象のドラマ・映画一覧

作品名	年度	平均視聴率	場面数
ふぞろいの林檎たち	1983	17.6%	34
愛しあってるかい!	1989	22.6%	95
男女7人秋物語	1987	30.0%	48
愛という名のもとに	1992	24.7%	40
白線流し	1996	10.9%	64
Beautiful Life	2000	32.3%	51
GOOD LUCK!!	2003	30.6%	20
オレンジデイズ	2004	17.4%	24
やまとなでしこ	2000	26.4%	29
人にやさしく	2002	21.4%	30
電車男	2005	21.2%	34

※ 「年度」は、放送・上映された年度

※ 「平均視聴率」は、すべて関東地区・ビデオリサーチ社調べ

<場所・構成要素の項目>

次章の表 3.1 と表 3.2 は、分析時に分類した「場所」と「構成要素」の一覧である。場所に関しては、道端・橋・海・川・公園など計 18 項目に分類することができた。原則として、1 作品のみにしか見受けられない項目は、その作品のみの特殊な項目であるとして除外した。構成要素に関しても同様に、ベンチ・街頭をはじめとした人工物や木・水などの自然物までの計 22 項目に分類できたが、特殊な項目は除外対象としている。

3章 データから見る場所性の考察

3-1 データー一覧

この章では、表 3.1 場所データ、表 3.2 構成要素データ、表 3.3 年代別の場所データを参考として、特徴のある場所や構成要素から推測できる場所性を考察する。

表 3.1 場所のデータ (単位: 場面数)

	告白	相談	喧嘩	別れ
道端	51	53	15	4
橋	32	14	0	2
公園	31	34	7	1
海	22	9	2	1
玄関	16	13	3	3
川	24	9	2	2
駅	7	4	0	7
空港	0	0	0	2
バス停	0	0	1	4
学校	8	7	1	0
駐車場	3	3	4	0
山	4	0	0	0
並木道	9	5	1	3
スキー場	6	0	0	0
遊園地	2	4	0	0
温泉	0	2	0	0
野球場	0	2	0	0
商店街	1	0	1	0

表 3.2 構成要素のデータ (単位: 場面数)

	告白	相談	喧嘩	別れ
建物	144	109	24	22
街灯	82	50	12	9
車	39	33	11	15
看板	34	33	9	7
ベンチ	38	42	7	2
柵	77	52	6	11
船	16	8	2	0
橋	6	8	1	0
信号機	5	4	1	0
遊具	5	9	3	0
公衆電話	1	0	1	0
自販機	3	0	0	0
線路	2	2	0	0
リフト	2	0	0	0
オブジェ	4	1	1	0
噴水	3	2	1	0
木	113	102	19	11
水	67	24	6	5
草	48	45	11	7
花	4	1	1	1
石	16	8	1	1
土	0	2	0	0

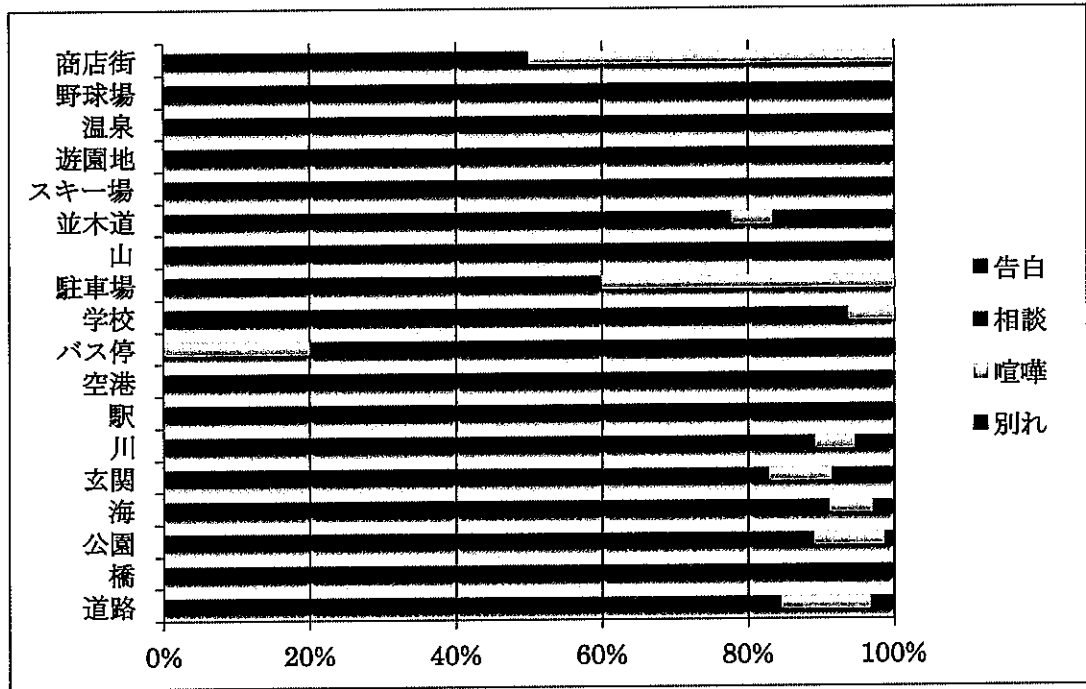


図 3.1 100%積み上げの場所データ

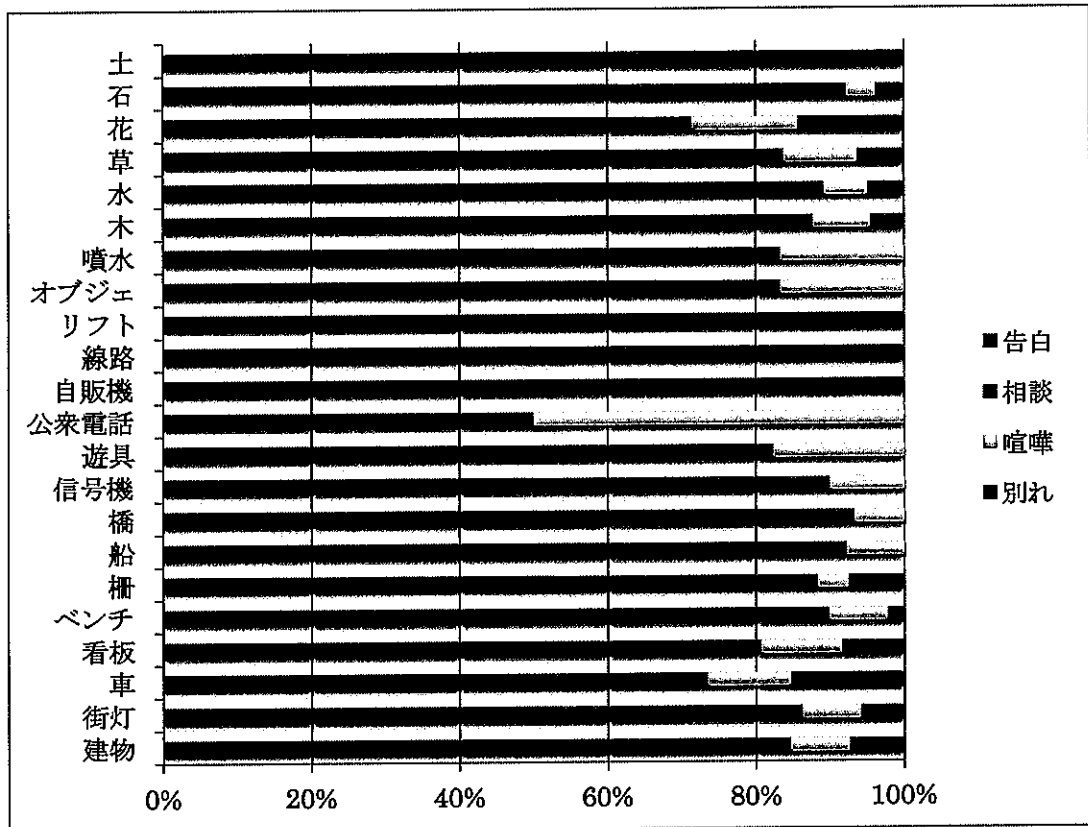


図 3.2 100%積み上げの構成要素データ

表 3.3 年代別の場所データ

1980 年代			2000 年代		
項目	サンプル数	サンプル率	項目	サンプル数	サンプル率
合計	178	100.0%	合計	175	100.0%
道端	62	34.8%	道端	40	22.9%
橋	21	11.8%	橋	17	9.7%
公園	17	9.6%	公園	43	24.6%
海	15	8.4%	海	17	9.7%
玄関	13	7.3%	玄関	15	8.6%
川	12	6.7%	川	6	3.4%
駅	7	3.9%	駅	4	2.3%
空港	1	0.6%	空港	0	0.0%
バス停	3	1.7%	バス停	2	1.1%
学校	5	2.8%	学校	9	5.1%
駐車場	3	1.7%	駐車場	4	2.3%
山	2	1.1%	山	2	1.1%
並木道	2	1.1%	並木道	12	6.9%
スキー場	5	2.8%	スキー場	1	0.6%
遊園地	4	2.2%	遊園地	2	1.1%
温泉	2	1.1%	温泉	0	0.0%
野球場	1	0.6%	野球場	0	0.0%
商店街	1	0.6%	商店街	1	0.6%

※ サンプル率とは、年代別で合計サンプル数が一致しないため、

各年代の各場所のサンプル数／各年代の合計サンプル数×100

のパーセンテージで算出した数字である。

※ 1990 年代は、合計サンプル数が 1980 年代、2000 年代と比較して

数自体が少ないため、この章の考察では考慮しない。

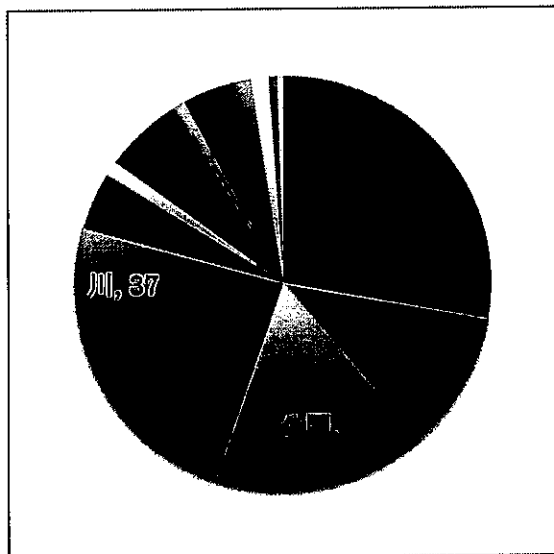
3-2 道端

まず特徴が見られた項目は、場所データ項目【道端】である。

道端は、表 3.1 より場所データ合計サンプル数が最も多い場所である。見受けられた行動としては、【告白】・【相談】がそれぞれ 51 場面と 53 場面となっている。

しかしながら、この 2 つを時間別で【昼】または【夜】に分類すると、表 3.4 のように夜に告白、昼に相談がそれぞれ多いという結果となっている。このことから、同じ場所でも「時間」によって行動が変わることがわかる。

表 3.4 道端の昼・夜での比較



道端		
	昼	夜
告白	15	36
相談	36	17

図 3.3 場所の合計サンプル内訳

3-3 公園

次に特徴があった項目は、場所データ項目【公園】である。

図 3.1 道端のサンプル率と図 3.2 公園のサンプル率を比較すると、1880 年代から 2000 年代にかけて「道端」が 34.8%から 21.1%になることに対し、【公園】は 9.6%から 22.6%となっている。また、場所データ項目【公園】と構成要素データ項目【ベンチ】が同時に出てくる場面は、73 サンプル中 38 サンプルとなっている。これらのことから、1980 年代から 2000 年代にかけて「歩きながらのコミュニケーション」から「動きを止めてのコミュニケーション」を図ることができる場所性が求められるようになったと考えられる。

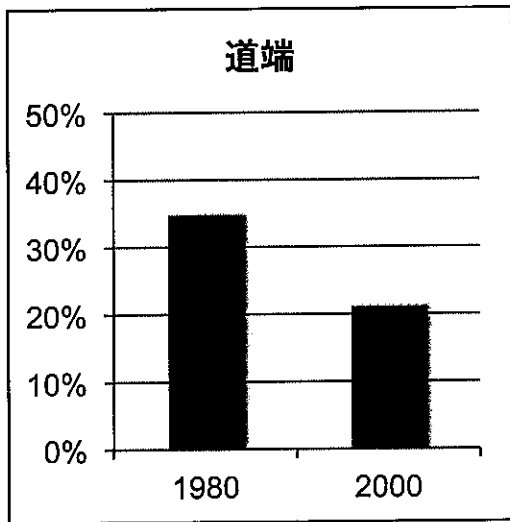


図 3.4 道端の年代別比較

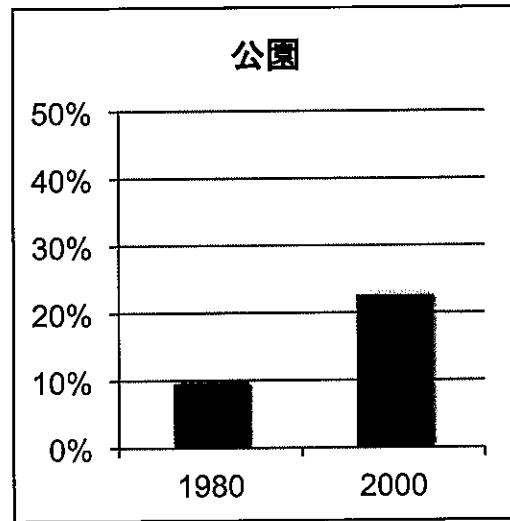


図 3.5 公園の年代別比較

3-4 海

場所データ【海】にも特徴が見られた。図 3.3 海の年代別比較をみると、1980年代と2000年代でそれぞれ8.4%、8.9%となっている。前節の【道端】【公園】と見比べて【海】は、恒常的な場所性を発揮していると考えられる。また社会的背景としては、1980年代のウォーターフロント開発が進み、海沿いのデートスポットが増加したことが背景としてあがると考えられる。

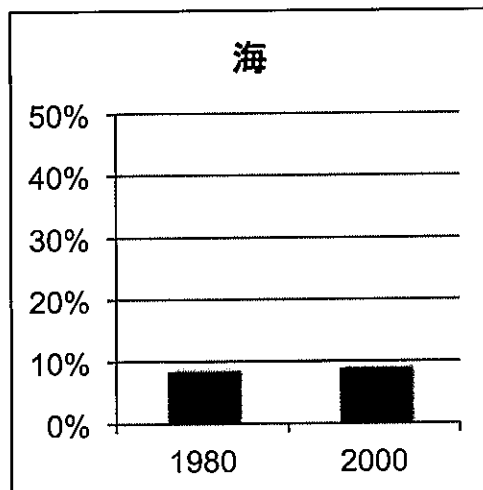


図 3.6 海の年代別比較

3-5 スキー場・遊園地・温泉・野球場

場所データ【スキー場】【遊園地】【温泉】【野球場】といった娯楽のための場所に特徴が見られた。表 3.5 のように 1980 年代の場面にはいくつか見られたが、2000 年代にはほとんど見られない。この要因としては、バブル経済のような社会的背景が考えられる。

表 3.5 スキー場・遊園地・温泉・野球場の年代別比較

1980 年代			2000 年代		
場所	サンプル数	サンプル率	場所	サンプル数	サンプル率
スキー場	5	2.8%	スキー場	1	0.6%
遊園地	4	2.2%	遊園地	2	1.1%
温泉	2	1.1%	温泉	0	0.0%
野球場	1	0.6%	野球場	0	0.0%

3-6 駅・空港・バス停

最後に場所データ【駅】【空港】【バス停】になるが、ここでは行動のなかでも【別れ】が多く見られた（図 3.5、表 3.6）。最後の別れの言葉を送るといった行動は、これらの場所で行われる傾向が強いため、別れの行動に影響を与える場所性が伺える。

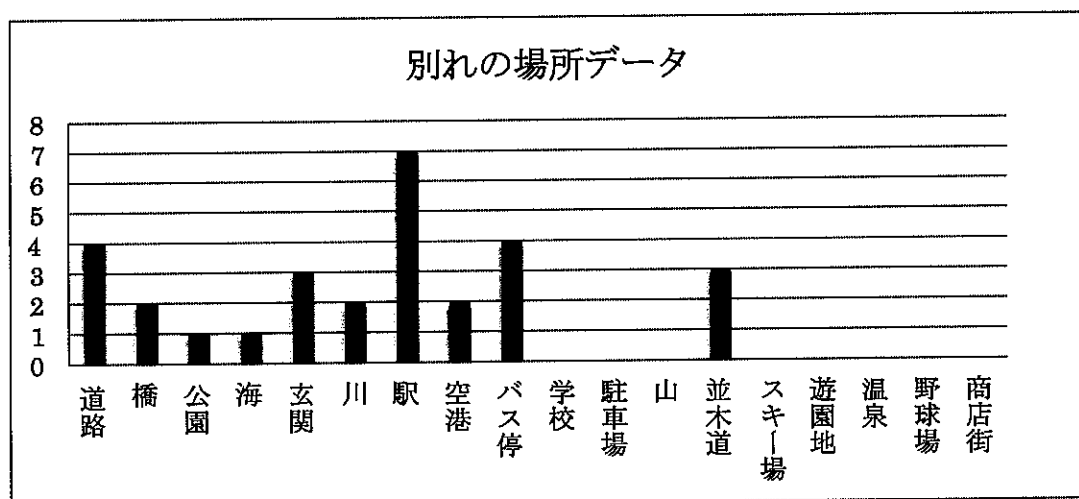


図 3.7 行動「別れ」の場所データ (単位: 場面数)

表 3.6 駅・空港・バス停の場所データ（単位：場面数）

	告白	相談	喧嘩	別れ
駅	7	4	0	7
空港	0	0	0	2
バス停	0	0	1	4

3-7 データから見る場所性の考察

場所データ・構成要素データ・年代別データから場所性を分析すると、場所や時間、構成要素の組み合わせからいくつかの変化が見られることから、場所性とは場所そのもの、時間帯、その場所を構成する要素によって行動に影響を与えるといえる。その影響の与え方は各々で異なっている。また、その場所性によっては恒常的であるものもあれば、時代背景によって変化するものもあると考察できる。

4 章 因子分析による場所性の考察

4-1 因子分析の適用

470 場面から収集したデータを「場所」「構成要素」「時間」の組み合わせごとに整理した（下表の有効ケース： $n=222$ 、同データは巻末に掲載）。その場面データをもとに因子分析を行い、【告白】・【相談】・【喧嘩】・【別れ】といった非日常的コミュニケーションの4つの変数に影響を及ぼしている共通因子を探し出した。

まず、4 変数をそれぞれ【告白】 = a , 【相談】 = b , 【喧嘩】 = c , 【別れ】 = d として、共通因子を F 、独自因子を e 、変数 a, b, c, d に対する因子負荷量を r, s, t, u とおき、次を定義する。

$$a = rF + e_a , b = sF + e_b , c = tF + e_c , d = uF + e_d$$

因子分析の基本モデルから、変数それぞれの分散を定義する。

$$S_a^2 = r^2 + S_{e_a}^2 = 1 , S_b^2 = s^2 + S_{e_b}^2 = 1 , S_c^2 = t^2 + S_{e_c}^2 = 1 , S_d^2 = u^2 + S_{e_d}^2 = 1$$

また、相関係数を次のように定義する。

$$S_{ab} = rs , S_{ac} = rt , S_{ad} = ru , S_{bc} = st , S_{bd} = su , S_{cd} = tu$$

4 変数【告白】 = a , 【相談】 = b , 【喧嘩】 = c , 【別れ】 = d に対する基本等計量は表 3.1 の通りである。

表 3.1 場面データの基本統計量

基本統計量						
変数	n	平均	不偏分散	標準偏差	最小値	最大値
告白	222	3.005	17.317	4.161	0.000	30.000
相談	222	2.257	16.599	4.074	0.000	31.000
喧嘩	222	0.518	1.156	1.075	0.000	6.000
別れ	222	0.392	0.493	0.702	0.000	4.000

データを標準化し、相関係数を求める。(表 3.2)

$$S_{ab} = rs = 0.603, S_{ac} = rt = 0.556, S_{ad} = ru = 0.244$$

$$S_{bc} = st = 0.695, S_{bd} = su = 0.161, S_{cd} = tu = 0.120$$

表 3.2 相関係数

相関係数				
	告白	相談	喧嘩	別れ
告白	1.000	0.603	0.556	0.244
相談	0.603	1.000	0.695	0.161
喧嘩	0.556	0.695	1.000	0.120
別れ	0.244	0.161	0.120	1.000

4-2 因子負荷量による場所性の考察

上記で得られた相関係数から、因子負荷量 r, s, t, u を求める。(図 3.1)

$$r = 0.7012, s = 0.8662, t = 0.7975, u = 0.2022$$

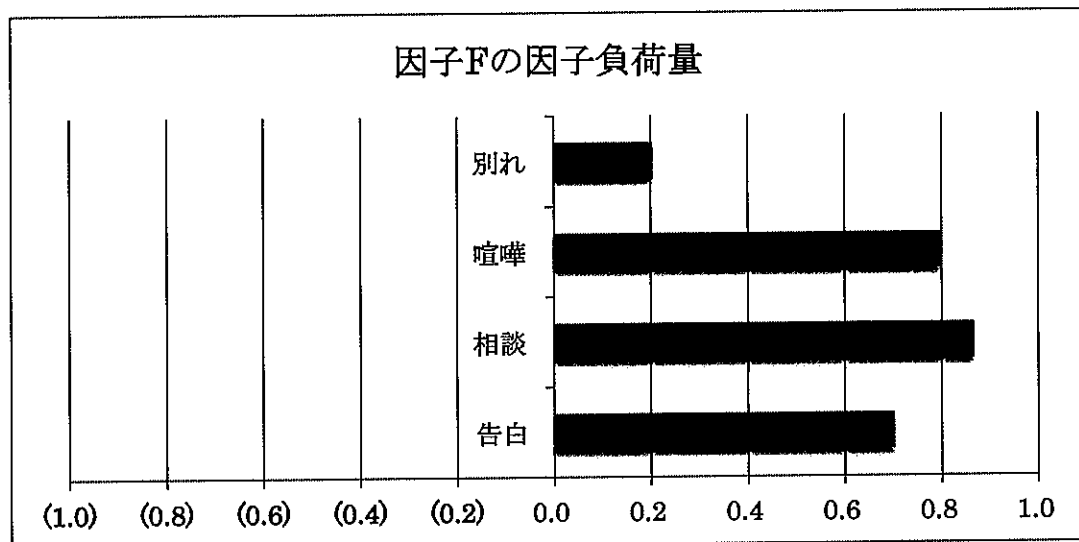


図 4.1 因子負荷量のグラフ

3つの変数【告白】・【相談】・【喧嘩】に関しては、それぞれ 0.7012 , 0.8862 , 0.7975 の因子負荷量が得られた。この数値から、因子 F と変数【告白】【相談】【喧嘩】には強い相関関係があると考えられる。変数【別れ】の因子負荷量が 0.2022 で十分な因子負荷量が得られないことに対しては、場面データが少なかったことが原因と考えられる。

このことから、「場所」「時間」「構成要素」が組み合わさり、変数となっている行動に影響を与える因子 F は「場所性」ということができる。そして、その場所性は【告白】・【相談】・【喧嘩】・【別れ】といった行動に影響を与えるということができる。

4-3 因子得点による場所性の考察

さらに、「場所」「時間」「構成要素」の組み合わせの中で場所性（因子 F）の場面データ (n) への影響度から場所性を考察するため、因子得点 $f(F_n)$ を算出する。まず、場面データを標準化した行列を Z、表 3.2 の相関係数の相関行列を R、因子負荷量 r, s, t, u の行列を A とおき、次を定義する。

$$f(F_n) = Z \times R^{-1} \times A$$

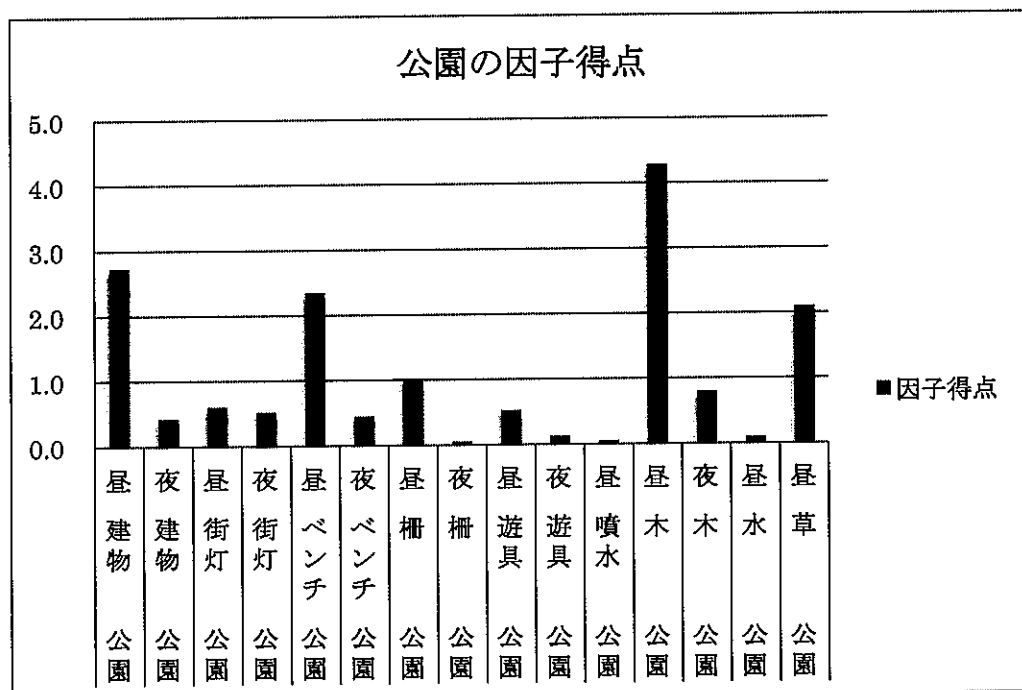


図 4.2 公園の因子得点 ($f(F_n) > 0$)

まずは、【公園】の因子得点を見ていく。図 4.2 は、公園と時間・構成要素の組み合わせで因子得点が 0 以上のデータを集めたグラフである。このグラフを見ると時間帯が【昼】の公園は【夜】と比較しても共通して因子得点が高い。また「【公園】【昼】【木】」「【公園】【昼】【草】」の項目は、因子得点がそれぞれ 4.2810 と 2.1002 となっており、構成要素に【木】【草】といった緑の多い昼の公園は場所性が強いことがわかった。さらに「【公園】【昼】【ベンチ】」の項目は、因子得点が 2.3489 で場所性が強い結果となった。

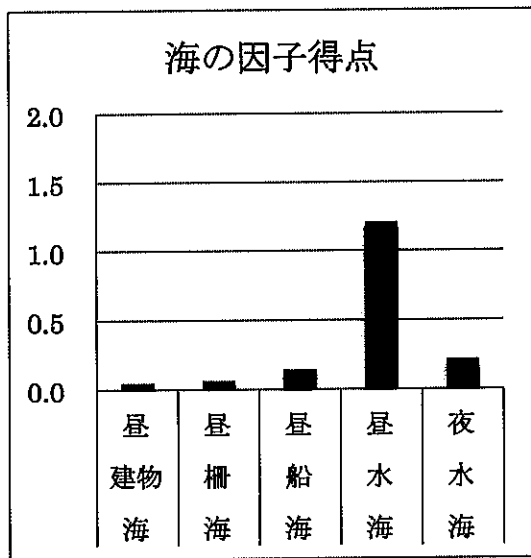


図 4.3 海の因子得点 ($f(Fn) > 0$)

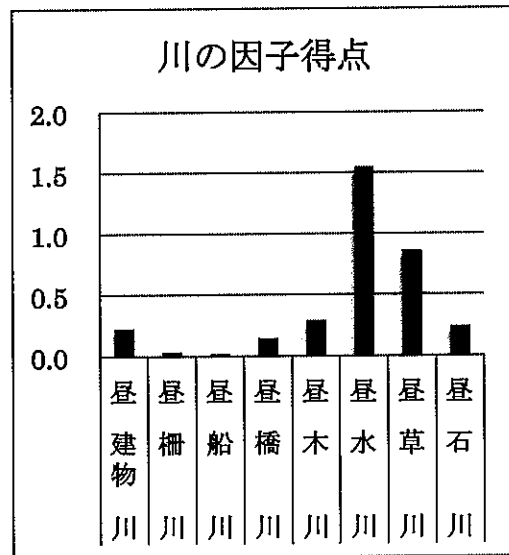


図 4.4 川の因子得点 ($f(Fn) > 0$)

次に【海】【川】の因子得点を見ていく。両者とも構成要素【水】がある場面で因子得点が高くなっているが、時間別でみると【夜】よりも【昼】の方が高い結果となっており、因子得点は「【海】【昼】【水】」が 1.2105 に対して「【海】【夜】【水】」が 0.2145、「【川】【昼】【水】」が 1.5496 に対して「【川】【夜】【水】」-0.1849 という結果になった。このことから【海】【川】の場所性を強めるためには、【水】が「見えている」ことが条件となることがわかる。

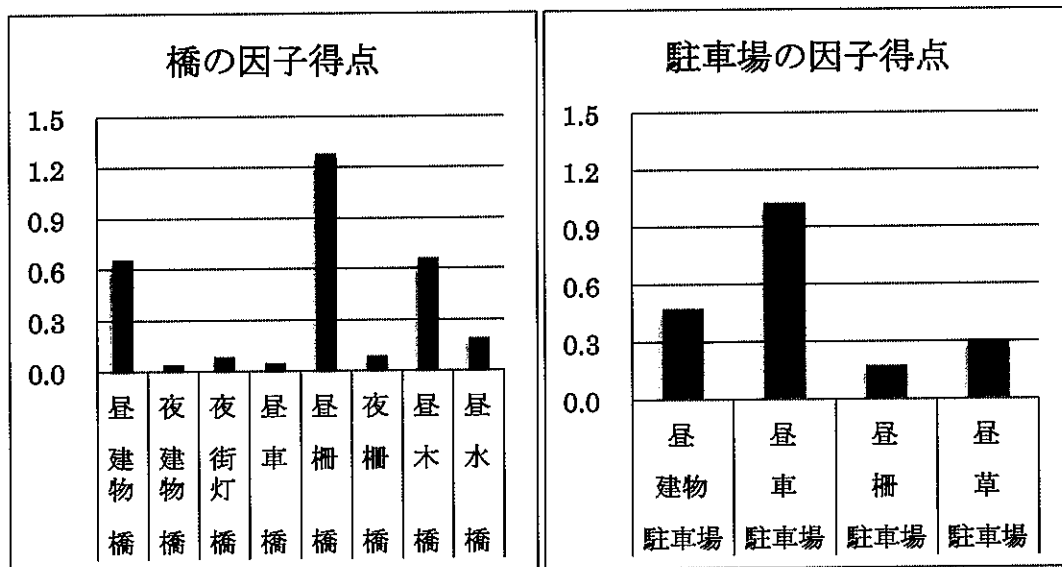


図 4.5 橋の因子得点 ($f(Fn) > 0$)

図 4.6 駐車場の因子得点 ($f(Fn) > 0$)

そして【橋】と【駐車場】の因子得点を見ていく。ここでは「【橋】【昼】【柵】」の項目と「【駐車場】【昼】【車】」の項目の因子得点が、それぞれ 1.2802 と 1.0273 となっている。「構成要素」はその場所にあって当然のものではあるが、因子得点が 1.0 以上あることから「場所」そのものに高い場所性があると考えられる。

4-4 因子分析による場所性の考察

最後に、この章全体を通しての因子分析による場所性の考察をまとめる。

この章では、因子負荷量 ($r = 0.7012$, $s = 0.8662$, $t = 0.7975$, $u = 0.2022$) を算出したことにより、場所性を統計的に算出することができた。ここでは、因子負荷量が行動の変数と強い相関関係があることから、場所性が行動に影響を与えると証明することができると考えられる。また、因子得点 ($f(Fn)$) を算出することにより、場面における「場所」「時間」「構成要素」の組み合わせ別に、場所性がもたらす行動への影響の強弱を測定することができた。

場所性の存在とあわせて、行動への影響の程度を数値化することができたと考えられる。

5章 今後の展望

現段階では、因子分析を用いることにより非日常的コミュニケーションを中心とした行動（愛の告白・悩み相談・喧嘩・別れ）に「場所性」が影響していることを明らかにすることができた。ただ、ここまでの研究はごく基礎的なものであると考えている。その理由のひとつとして、変数である行動が限定的であることがあげられる。本研究では、ドラマや映画の場面における行動を大まかな枠組みで分類しているが、そこで表現される内容をより細かく検証することで、そこから浮かび上がる場所性の精度を高めることができると考えている。

また、場所性の存在を明らかにできたことから今後、実際にどのような場所・時間・構成要素の組み合わせ、つまり場所性が、どのような行動に結びつくのかを検証することも必要である。このことに対しては、対象とする行動の変数を増やし、主成分分析を行うことで「場所性」の性質について言及することができると考えている。年代別の比較によって現在と過去の「場所性」の変遷を分析すること、国別の比較を行うことによって日本と海外における「場所性」の性質の違いを抽出することができると考えている。

今後の展望として、場面データにおける変数の増加が必要である。時間の許す限りこの課題に取り組み、研究手法としての精度を上げていきたい。

<参考文献>

エドワード＝レルフ（高野岳彦 訳）『場所の現象学』（筑摩書房，1999）